

# 「パンジャービー・スーバ」半世紀の軌跡

—インド連邦下の言語州、政治とスィク社会—

杉 山 圭以子

## Looking back on the Punjabi Suba 50 Years in India

Keiko Sugiyama

Half a century has already passed since the idea of a Punjabi-speaking State (or Punjabi Suba) came into existence in 1966. The real cause for the demand for the creation of a unilingual state came after the failure of the regional political party called Akali Dal to secure constitutional safeguards for the Sikh minority community in the new Constitution. Initially, it was rejected by the central leadership due to the territorial, as well as, political considerations after the Independence/Partition of India. But a new environment changed everything. The Sikhs have at last become the majority in the State and the linguistic achievement coincided with an economic event of far-reaching implications for the various state lives. Then, wasn't there a setback? This paper aims at exploring the society in the context of the state matter.

キーワード：インド・パンジャープ州、パンジャービー・スーバ、言語別州再編、パンジャービー語使用州、スィク教、スィク教徒

*Key words* : Indian Punjab State, Punjabi Suba, linguistic state reorganization, Punjabi-speaking State, Sikhism, Sikhs

はじめに

2016年6月、世界銀行はこの年明けに発表した世界経済の成長率見通しを半年ぶりに2.9%から2.4%に下方修正するなか、新興国インドの経済成長については7.6%で力強く安定して推移すると発表した。その後、同年同期の実質成長率は予想をはるかに上回り、8%の大病に乗った。成長の原動力は

内需の好調に支えられた好況にあるとされたが、その後同年8月、インド上院は29もの州ごとにバラバラな間接税を全国的に一本化する憲法改正案を承認（与党多数を占める下院では前年中に可決）、連邦政府は独立インド最大の税制改革として取り組んできた経済改革の一つを確かに「かたち」にした。

市場経済へシフトし、早くも四半世紀の時を経て、インド経済の世界に占める近年のプレゼンスは、2018年現在も8.2%（8月末日、インド統計局公表）と盤石なものとなってきた。市場原理の浸透によるところの、まさにこの成長の時代をはさみ、同連邦下に半世紀という一つの区切りとなる歩みをその州史に確かに刻んだ地域がある。インド西北部の一州、「パンジャービー・スーバ（Punjabi Suba）」である。「スーバ」とは、もともとアラビア語、ペルシア語に由来するインド近世ムガル朝の行政用語であり、州（英語の province）に相当する。したがって、「パンジャービー・スーバ」とはインド連邦内の一州、現パンジャープ州のことになる。ただし今日、この州名が行政上、また広く人々の間で用いられているかと言えばそうではない。インド連邦を構成する各「州」には通常stateが用いられ、パンジャープ州もそのようにPunjab Stateと表記される。

では、二つとも同じ「パンジャープ州」であるならば、「スーバ」が付く場合と付かないそれとはどのように区別されるのか。それは今から遡ること半世紀前となる1966年、当時のパンジャープ州が「言語別州再編成」という手続きのもと、州のかたちを変え、今日にそのままつながるパンジャープ州になったという事情を踏まえている。「スーバ」は、その折、州パンジャービー語をもって「パンジャービー語使用州（a Punjabi-speaking State）」の実現を求める州内運動体がその目標に付けた名称であった。したがって、本稿でもこの州史に遡られる文脈においては「スーバ」でいく。事実その後、運動は実現したのであったから、運動後となる同州の通常文脈においては、あえて「スーバ」を付けない。そして本稿はこの確認のもと、1960年代半ばに起こった同州の言語による再編までの事情を中心に、その後今日に至る半世紀のパンジャープ州事情を概観するものである。

現在、29州・7連邦直轄地（Union Territories）からなるインド連邦内にあって、ここで注目すべきはその州サイズではない。州人口数でもない。むしろ、他州に比べれば、それらは地味なものだ。何しろ、後にもふれる通り、

1966年の「言語別州再編成」は、強いて言えば、インド近現代史のなかで発生してきた数々の「歴史的組み替え」のあらたなもう一つにほかならず、同州はさまざまな意味においてダウンサイズ化してきたからだ。その一方、パンジャープ州とは、「インド穀倉地帯」として、この国の穀物備蓄の最重要部分を支える豊かな農業先進州であり、スーバ成立と同年、「緑の革命」がインド国内で最も早くにはじまった地方であったということは漏らさずここにあげておこう。

20世紀半ばのこの「スーバ」の実現から、さらに遡ることおよそ100年以上も前、パンジャープの地は土着の王国支配下にあった。しかし、パンジャービー語の公用語化はそのような時代にすらありえなかった。一体、この20世紀の選択は同パンジャープのその先に何を見通し、その州史におけるどのような局面を語るものとなっているのだろうか。まぎれもなく、インド連邦の一部として。

インド成長の時代、急速なグローバル化が既成概念を壊しながら国境線を跨いでやってくるという今日の勢いは否定できないまでも、そこに並走し、この国の細部に執拗に宿り続けているものを近年追いかけている。本稿はこの関心のもと、「パンジャービー・スーバ」成立から50年を意識し振り返る、筆者のフィールドに関する一論考である。

## 1. スーバ成立までのパンジャープ州領域、人と歴史

インド亜大陸西北部に位置し、ペルシア語で「五つの川」にその名を由来する「パンジャープ (Punjab)」とは、もともとインダス川水系の複数の支流沿いに広がる豊かな水資源に恵まれた広大な歴史的領域である。現パンジャープ州はこれを引き継ぐものではあるが、その地理的「かたち」は遡ってこのわずか200年足らずのうちに様変わりした。

まず、冒頭でも述べた通り、直近では1966年の「パンジャービー・スーバ」の成立により、独立以来の連邦制の枠組みに発生した変更を同州は反映させている。パンジャープ州にパンジャービー語は一見、至極当たり前のことのようにあるが、同州の歴史的前提は、本来そのような言語の位置づけを普通とはしない。

1947年の独立後、インド憲法（1950年発布）は、インド各地にみられる多言語使用状況を前提に、特定の言語を国語として認めておらず、地域に応じ、

複数の公用語政策を採用してきた。周知の通り、独立前には英領インド直轄州とは別に、何しろ500以上もの数に及ぶ土着の藩王国もあったインドであった。このため独立までに、まずそれらが新生インド諸州にほぼ領土的に整理・統合された。続く独立と新憲法発布後、南インドのテルグ語地域において初の言語州（アーンドラ・プラデーシュ州）が創設されるや、その流れは「言語別州再編成法（States Reorganisation Act, 1956年）」の制定に勢いを付け、複数言語と住民の居住空間の問題は14州・6連邦直轄地として合意が図られた。ただし、この50年代の言語別州再編時には、依然、見送られるかたちで残された問題があり、その一つが「パンジャービー語使用州」実現に関する、いわゆる同地域内から起こった「パンジャービー・スーバ」運動であった<sup>(1)</sup>。

詳細はまた後に述べるとし、1966年、同問題についてインド連邦政府がようやくその実現に最終的理解を示すと、パンジャーブ州（当時）はヒンディー語州としての新ハリヤーナー州をそこから分離させ、さらに隣接する当時の連邦直轄地ヒマチャル・プラデーシュにその州領域の一部を統合させることで、その「かたち」を自ら同じ州名で新たなものとした。これによって、パンジャービー語話者は同州の多数派にはなったものの、同じそのパンジャービー語を母語とする人々のなかに、新たに隣接することになったヒンディー語使用州に組み込まれるという理不尽を被った人々がいたことは皮肉なことである。さらに使用言語によるところの同線引きについて言えば、それは多数派主要言語となったわけであり、前者パンジャービー語使用州の場合はシク教徒がその多数派となり、後者ヒンディー語使用州では、それはヒンドゥー教徒にほぼおさまった。つまり同言語編成は、結果から言えば、おおむね「宗教別コミュニティ」編成も同時に行なったことに等しかった。一言語をそもそも執拗に分離しなければならないという主張の前に、ここにはなぜそもそも二言語が併存していたのかである。

実はこの「パンジャービー・スーバ」誕生からさらに遡る1947年、パンジャーブ州（当時）はイギリス植民地支配の総決算となる大きな歴史の局面に直接関わった。いわゆる「インド・パキスタン分離独立」による二つの国民国家の誕生であり、パンジャーブ州はそれに伴い、インド東部のベンガル州と同様に、その国境線を用意する線引き州になったからである。これにより、当時のパンジャーブ州について言えば、そのほぼ西半分が現パキスタン

領パンジャーブ州となり、イスラーム教徒多住地域となった。他方、東側半分はインド領となり、主としてスイク教徒ならびにヒンドゥー教徒が居住する地域となった。

ただし、先の二言語事情にふれば、それはどちらかの集団によって一つの言語が独占的に用いられていたというような窮屈なことではなかった。むしろ双方により、どちらもの言語が日常的に使用されることを常態とし、コミュニケーションが互いに図られていた。同様に、このようなく横断的言語運用は、独立後、パキスタン側パンジャーブ州住民となる人々の国語であるウルドゥー語についても、理解を可能とする人々がインド・パンジャーブ州内にあって存在するのは今日も稀ではない。同じ事情は、パキスタン・パンジャーブ州住民となった人々の、分離独立までのヒンディー語、パンジャービー語との関係にもあてはまろう。

もともとイギリスにとって、このパンジャーブとは、東部のベンガル地方からはじまる100年もの歳月をかけたインド征服の「上がり」(1849年併合)の地であった。同併合前まで、それはスイク教徒(Sikh)であった土着の藩王が治める「スイク王国」であり、かのムガル帝国弱体後の18世紀、群雄割拠という体でインド西北部に領地を広げていた実力者集団をこの王国がほぼ半世紀に渡りまとめ上げていた。最終的にイギリスは、この王国との二度の戦争を経て勢力圏をさらに拡大し、それをもってインド支配の版図を完成させた。

インド英領化後のイギリスは、まもなく北インドを中心に発生した「大反乱」(1857年)に手こずりながらも、それを收拾するや、翌年にはその流れを「イギリス・インド帝国」の成立につなげている。彼らにとって、当時、支配の浅いパンジャーブには、すでにそれだけで十分な統治価値があった。この時期の反乱とは、言うなれば積年のイギリス支配に対するインド側からの「異議申し立て」である。しかも、それがスイパーヒー(セポイ)と呼ばれるインド人傭兵たちの蜂起ではじまったことはイギリス人たちを大いに慌てさせた。イギリス・インド軍の建て直しが時の急務となり、そこに時宜を得て動員されるのが、スイク王国時代の軍事を支えたその職能集団としてのパンジャービーたちであった。同時にこの頃イギリスは、反乱の教訓にも学び、同帝国の維持に必要なインド側の「忠誠」について深く思索をめぐらすようになっていた。将来にわたって、いかに安定的かつ良好な関係を

そこに築き続けられるのか。まもなく一つの方策がたてられ、それが具体的に姿を現した。同州内の水資源を利用する大々的な農業インフラ投資であり、20世紀初頭には、その破格の植民地事業を通し、パンジャープの地はアジア屈指の規模を誇る一大灌漑地帯へと変貌を遂げた。

事業はその後、豊かな農耕地の分配というかたちで、軍関係者への「土地賞与」をはじめ、先進的なモデル農村作りへと確かに発展した。しかしながらその実際は、土地の利害と深く結びついた有力な旧支配層を巻き込みながら展開した結果、農村部には植民地権力との深い癒着が生まれ、1920年代初頭までには、そこに「農村部中心主義」とも言うべき特異な支配構造とそれを支える州政治が定着するようになった<sup>(2)</sup>。ちなみに、独立前の「パキスタン建国運動」(のちにそれは1947年、インド・パキスタン分離独立というかたちで実現)は、このパンジャープ主流政治の流れとはおよそ異質なインド<他州>のムスリム事情に端を発してはじまった。その限りにおいて、パンジャープは紛れもなくムスリム多住州でありながら、長く「パキスタン」には与せず、イギリス権力の撤退がいよいよ避けられないものとなる最後まで、自らの将来には独自の選択があるとしていたのである<sup>(3)</sup>。

インド亜大陸の他地域を圧倒する、この言わば破格の植民地事業の土台がパンジャープを今日まで続く「農業州」に押し上げていくことになった一方、この植民地期には軍駐屯地(cantonment)に代表される、これも他には類をみない新しい「都市部」が建設されはじめたことも重要である。新職種としての軍隊はパンジャープ農村部からの子弟たちを重点的にリクルートし、この「都市部」に集める一方、その軍隊で必要とされる軍需品一切の調達拠点とした。とりわけ軍人の鞆や編み上げ靴をはじめとする皮革製品の需要がこの時期に空前の高まりをみせたことは注目される。

当時、皮は誰でもが扱えるものではなかった。伝統的村落経済の分業体制で最・底辺部に位置づけられ、専ら死骸となった<不浄の>動物処理を生業とするカースト区分を代々引き受けてきた人々(「指定カースト(Scheduled Caste/SC)」として植民地期にはじまるこの用語は今日も続く)に委ねられていたからだ。彼らはその<歴史的>特権にその一大好機を重ね、時期を逃さずに経済的前進を果たした。新「都市部」はこうして、従来、農村部にあって職種とともに社会参画が制約され、ほとんど世襲的にその生き方を固定されてきた人々を、この時期「移動」というダイナミズムとともに、予測もつ

かない勢いに乗せた。

植民地期にはじまるパンジャープの農業と軍隊、さらにはカーストとの関係は、そこに同州の宗教事情を重ね合わせることでこの地域の際立った特徴をまた一層浮かび上がらせる。とりわけ、これまで度々言及してきたスイク教 (Sikhism) はそこに重要な鍵をにぎっている。開祖 ナーナク (Guru Nanak, 1469~1538) の誕生の地であるこのパンジャープは、現在もその国内最大信徒 (実数にして1700万人) を抱えるホームランドである。2011年国勢調査によれば、確かにインド総人口13億のなかでは1.7% (実数にして、他州在住の信徒を含め、およそ2000万人) に過ぎない少数派であるが、ここにさらに500万人を数える在外スイク移民が世界に散在する。何より、このスイク教のはじまりを考える時、デリー・スルタン朝末期からムガル朝初期という、きわめて「創造的な時代」の思想潮流がそこに並走していたことは見逃されてはならない<sup>(4)</sup>。

すでに外来のイスラーム教が浸透していく際の複数の道筋につながっていたこの地方である。まず侵入者であるトルコ人たちやアフガン人たちが、続いてモンゴル帝国の分裂を経て到来する中央アジア方面からの新支配者たちがその時代を身近にし、さっそく「統治」の見取り図を周到に描いたであろうことは間違いない。なぜなら、そこには異端的民衆信仰とも言うべきものだけが放つ一種の超然的気配が強く支配的であり、権威の一切に媚びず、近づかず、個の信に足るだけを求道する人々の精神性が著しいものであったからだ。支配者たちが無関心でありえるはずがない。神への献身とそれによる合一を説くバクティ信仰やヨーガ派の実践、さらには神秘主義、そのどれもが実は権威、正統、教条につながるこの社会の深い闇と頑迷との一切を向こうに回し、力強く「底辺」に生きる人々を覚醒させていた。

なかでもその矛先は、カースト伝統秩序への「疑義」とその「打破」とに鋭く向かい、そうした思潮を帯びる一切が、荒々しくも、人々の最前線の生き方となっていた。同時に、そのような生き方を求める人々の深い敬愛を受ける徳の高い聖者や国内各地を広く遍歴する行者たちの動静も目が離せないものだった。その時代、両者の接触において広く用いられた西北インド起源の共通語としての混成語 (lingua franca、ペルシア語・アラビア語の影響をもつ) は言語の<横断性>という柔軟な発想をこの地方に特有なものとし、また実際に根付かせていた。何より、そのような対話における人間<技>は、



言語と使用者との関係を狭く一対一的に限定するものではなく、他者領域がもつあらゆる理解の幅に深く探り>を絡ませ、人々をつなぎ、つながる可能性にたゆまず働きかけた。こうしてパンジャブは、歴史的にも希有なまでに「共生の実験場」さながらの様相を次第に色濃くしていくことになった。やがて、ナーナクのスイク教（スイクとは弟子の意）は、この社会に先行した前例のない革新的思想を引き継ぎ、そのナーナクから数えて十人目のグル（導師）を最後に、聖典『グル・グラント・サーヒブ』のもとに続く信者たちを結集させ、今日に至っている。折しも2019年はこの開祖生誕550年の節目の年となる。

## 2. スーバ成立とその後のパンジャブ州政治

1960年代半ば、パンジャブ州（当時）はあえて「パンジャービー語使用地域」に再編されなければならないという、いわゆるスーバの主張を支えたものは、同じ独立後、1950年代に進んだ他地域の「言語州」実現要求とはひどく異なっていた。これまでこの「言語州」については、インドが多言語・多民族国家であるという事情から、独立後の国家統一とその発展に寄せて、さらにはインドの多様性を実現する枠組みとしてのインド連邦制の文脈において前向きに捉えられてきた<sup>(5)</sup>。しかし繰り返すが、「パンジャービー・スーバ」のケースは違った。実際、同要求は当初から別のものとして、見送られてきた。それどころか、むしろ「実現されてはならない」ものとして、当時、独立まもない連邦新政府を預かる国民会議派（以下、会議派と略記）の為政者たちは、その喉元に危うくささりそうになるのを懸命に避けていたというのが正しいであろう<sup>(6)</sup>。しかも首相ネルーがその最前線にいたことから、彼亡き後、スーバの課題をほぼ運命的に引き継ぐことになった娘インディアラの代に早晚その困難がまた露呈していくことになる。

そもそもスーバ要求の根拠とは、この1960年代に突然現れたものではない。遡れば同州が英領下に入り、その統治が進むなかでインド側に漸進的に積み上がっていくことになるアイデンティティの帰属に関わる問題と実は深く関わっていた。すなわち、それはこの地にあって「自らとは何者か」という問いである。ただし植民地下という磁場を条件に立ち上がる、とりわけインド大反乱後のそれは、この社会を限りなく分断しながら治めていく支配者イギリス側の思惑と限りなく連動し、込み入ったものとなっていた。



確かに英領パンジャープ州は、19世紀後半に導入された「国勢調査」の実施対象地域としても最も早かった。数の力で現地社会を描くというイギリスのその手法は、事実、この社会を構成する人々の「実勢」に向けられ、とりわけその「宗教コミュニティ」人口の諸局面をあぶり出すという内容において徹底をきわめた<sup>(7)</sup>。やがて、そこに注がれたイギリスの執着に呼応するかのよう、その成果を読み込む現地側社会では、常に「数えられること」をめくり、水面下の激しい競争がはじまるようになる。カウント行為の対象となること、すなわち、それは為政者の関心が注がれているという、それ以上に確かなことはない両者の「関係」を示すものだったからだ。同時期、そのコミュニティのあり方を「消えない」実体としなければならないとしてスィク・コミュニティのなかに発生した「スィング・サバー（スィク教信徒名となるスィングからとったその結束）」運動の社会改革運動のルーツもこの辺りの事情にたどられよう<sup>(8)</sup>。

重要なことは、こうして当時19世紀末、パンジャープはキリスト教宣教活動も含め、諸宗教による激しい「改宗競争」が展開する舞台となったということだ。新時代に相応しい生き方をどのように提供できるのか、それは宗教界に問われ、また同時にますます政治性をも帯びた。事実、それぞれの熱い営みが他との差異化とともに発信され、「改宗者」を新たに生んだ。イギリスはさらにその数値を定期的に更新し続けることで、支配者が認知する最新の情報としてそれを現地社会に伝え、結果的にその内部を競わせた。ただでさえ被支配者はこの社会を動かす決定権もない不利な厳しい条件下にある。まず支配者が認知する対象とならなければ、その植民地社会をより優位に渡る機会も狭められていく。

このようなインド側の競合状態は、何もパンジャープに限ったことではない。その後20世紀に入ると、それはそのままインド人の自治をどのように前進させるのかという「ナショナリズム」の枠組みのなかに各地でいよいよ昇華されていった。しかし、宗教の枠組みが結果的に執拗に残され、その「コミュニティ規模比」でしか物事の解決がなかなか進まなかったパンジャープには、後々まで大きな歴史的凝りが残った。200年にも及ぶイギリス植民地統治の大精算となった1947年の「インド・パキスタン分離独立」はもちろんその例外ではなく、むしろその最大のものとなる。

独立とはいえ、それは二つの国民国家の誕生だった。しかも、宗教コミュ

ニティの大移動（大入れ替え）を前提とし、多くの混乱を派生させた限りにおいて、それはほとんど歴史的イベントにも等しかった。史上まだ誰もそのような事態に臨んだことがないという不確かばかりの文脈において、イギリス側との権力移譲交渉が進んだ。パンジャブの事情に則せば、そこでムスリムは「パキスタン」を得て、また「インド」を得たヒンドゥーはスィク（独立前州人口比は13%）の協力をその前提とした。事のすべてがどの勢力にも上首尾に動いたわけではない。わけてもスィクは、引き続き少数派コミュニティとして、言葉に尽くせぬ不安を抱えながら、ともかくこの独立の「かたち」を受け入れる先に必ずや用意されるとするヒンドゥー為政者側からの、具体性をきわめて欠いた約束だけを頼りに新生インドへの帰属を果たした<sup>(9)</sup>。そしてそのことが、結局、同コミュニティ内に後々までわだかまりを残すことになった。

したがって、独立後のスーバの要求とは、「パンジャブの」大義であるとされたものの、もともと少数派であったこの地方の「スィクの」要求という文脈を明らかに歴史的にもつ。つまりそれ自体が、インド政治用語を用いればその特定コミュニティの大義を前面に出す宗派主義、すなわちコミューナル (communal) な要求だった。その意味において、独立までに宗教が政治の舞台と複雑にからみ合う危険な事態を目の当たりにしてきた独立インドの新しい為政者たちに、スーバのような分離主義的要求がすんなり受け入れられるはずがなかった<sup>(10)</sup>。また、その運動主体はアカーリー党 (Akali Dal、アカーリーとは不滅の意) として現在も続くパンジャブの地方政党である。前身は1910年代に遡り、もともと同州に存在するスィク教寺院 (gurdwara と呼ばれる) 内部の腐敗を叩き、その管理運営のあり方に透明性をもたせるべきだとするスィク信徒らによる自浄運動がはじまりであった。その活動は事実、周囲を圧倒するものであり、同20年代までには、インド内に近代政党として立ち上がっていた会議派をはじめとする諸政党と肩を並べるほどの存在感を放つようになった<sup>(11)</sup>。

独立の翌年、まずインド連邦政府はそのような性格の政治的要求が不穏な印パ国境線近くに広がりをもつことを避けるため、二つの提案をアカーリー側に行なった。一つは独立まで同州内にあった (英領直轄地とは別の) 藩王国群を、当時の国名を取り、PEPSUとしてまとめ上げ「スィク多住地域」とすることである。さらにパンジャブについては50年代に全国的に実施が

予定されている州再編成により、新生「パンジャープ州」（独立後、それまで同地は「東パンジャープ州」であった）になるとされ、上記の「スィク多住地域」をそこに統合し、全体の印象としてはスィク教徒たちによる新州の誕生を印象づけた。だが、アカリー党のなかの運動体はそれが依然パンジャービー語とヒンディー語との二言語併用であることに承服できずにいた。その後1950年代に入り、独立後初の「言語別州再編」がいよいよ実施の運びになると、パンジャープについても同政府提案通りで事は動いた。くだんの「単独州」については、宗教コミュニティに基づく「スィク州」となる困難がそこに予見されるという政府関係者の本音は結局伏せられた。実際、州再編委員会の報告書も、パンジャービー語とヒンディー語との言語的<近似>により、再編の非現実性を述べたに止どまった<sup>(12)</sup>。スーバ運動自体のなかにもやがてさまざまな温度差も出てくるようになった。ところが、事態は60年代半ばに至り、旧藩王国の一つであったインド北方のカシミールをめぐり、再度パキスタンと交戦状態となる（第二次印パ戦争）頃から大きな展開が起こる。

その前年となる1964年、初代首相であり、スーバの実現だけは何としても避けたかったネルーが逝き、インド連邦政府のかじ取りは会議派シャストリ首相に託されていた。ネルーの政治意思は同後継者にも共有されるものであったが、この戦争が勃発し、スィク兵士の目覚ましい活躍がインド軍のそれとして伝えられると、シャストリ首相は連邦議会内に急遽「スーバ」を検討する委員会を設け、その成果を「報告書」にまとめる段取りを決めた<sup>(13)</sup>。この背景には、生前ネルーがパンジャープ事案のすべてを任せられるほど全幅の信頼を置いていた同州の腹心が政治生命を絶つという逆風が会議派内に吹いていた事情も実は重なった。事態は早い段階でシャストリ内閣情報放送相となっていたネルーの娘インディラ・ガーンディーを動かし、その決断を下した首相本人に接近させる。「報告書」の作成は、こうして時の内相を通じてその後速やかに止めさせられる運びとなった。

ただし、それは50年代までに見てきた「スーバ」の牽制とは違った。シャストリ首相の対応にも伺えるように、この時期、国境線を抱えるパンジャープを取り囲む状況がそれほど予断を許さぬものとなって、政権党である会議派に迫る諸判断のすべてが非常に急がれていたからである。こうして想定外なことに、有力な同州政治勢力と<渡る>ものが求められるなかで、再度

「言語」が連邦政府側に浮上してきたのである。わけても会議派ガンディー女史がこの時期に警戒の手を緩めなかったのは、父ネルーの懸念だけではない。「言語」の突破がアカーリー党の伸長につながる先の、パンジャープ州政治の展開がすでにその視野に入ってきていた。手のうちを互いに知る関係から、女史は最高決定者シャストリ首相を超え、事実上自ら「スーバ」に先手を打ったことになる。「実現する」パンジャービー語一言語州のあり方に諸条件をつけて。すなわち、スーバは実現しても、それをアカーリー側全面勝利とはさせないものとする、それ自体が急を要す政治駆け引きとなったわけである。

1966年、パンジャープ州（当時）がついに新パンジャープ州とハリヤーナー州に分割された。一度はスーバ成立困難の根拠とされたパンジャービー語、ヒンディー語両言語の関係もそこでは切り離され、その各々が州言語として新たな州に帰属した。ただ、新たに連邦直轄地とされたチャンディーガルの、同二州による新都「共有」化という変則的事態はパンジャープ本来のその帰属の変更であったし、豊かな綿作地帯であるファジルカ、アボハル両地区のハリヤーナー州側への編入は圧倒的パンジャービー語使用者のヒンディー語圏への強制移動を意味した。スーバ実現は、こうして、当初アカーリー勢力の構想にはなかったものを抱き合わせるようになっており、事実そのように終息した。同時にその実現は、以下の点に寄せ、同州政治がその先に抱えることになる重要な「方向性」をすでに十分に指し示していた。

まずスーバ実現は、一つにスィクがそれまで抱えてきた少数派の地位をついに返上させ、同コミュニティを確かに多数派（60.22%／1971年国勢調査）に押し上げた。長く州内「少数派」スィクの擁護を掲げ、その利害を代弁してきたアカーリー党であったが、もともとその支持母体の核はあくまで農村部の有力ジャート（スィク・コミュニティ内の一カースト）であった。奇しくもスーバ実現と同年にはじまる「緑の革命」により、その政治基盤は彼らの支持を得て、さらに安定し、事実また前進した。二つめは、この事情との裏返しであるが、スーバ実現とはパンジャープ全州をあげて寿ぐようなものではなかった。繰り返すが、スーバはアカーリー党の運動であったからだ。同州の低位カーストたちにとって、それは当初から冷めたものであり、今日も、その存在は州人口の3割も超え、他州にはない際立った特徴を放っている。その意味において、両者の乖離はこの60年代を境にさらに深く進行した

と考える。さらに三つ目である。パンジャープ州政治のアクターはそう複雑ではない。独立後のそれまでに続いて、アカリー党と州会議派が中心的に州政治を動かしていく<sup>(14)</sup>。ただし、スーバ実現後、アカリー党はインド連邦内一州の「多数派」の立ち位置を得て、常に「インド中央」との交渉の間合いをどのようにとるべきかを次第に一級の関心事ととらえはじめていくようになる。

まず「多数派」という政治リアリティをもったアカリー党のその後10年である。独立当初から州政治に強い影響力をもつ会議派への対抗から、その構図を他政治勢力との提携のなかで越えていくようになったことは注目される。ただし、それ自体が選挙結果を受けてはじまる提携であったから、常に盤石なものとは言えなかった。重要なことはスーバ成立もあり、アカリー党には州・連邦双方会議派の「睨み」を跳ね返すだけの政治成果が求められたことだ。それはまた連邦政府による干渉や統制を抑え、強い州の舵とりを意味した。こうして「アーナンドプル・サーヒブ決議」(1973年)なる行動計画等が独自に精力的にまとめられていった<sup>(15)</sup>。ただし、その全体はスィク・コミュニティの結束をやはり濃く印象付け、そのもとで発信される限り、河川の水資源管理等を含む自立的農業運営や州内雇用機会の創出、さらには工業化の促進といった提起も直ちにインド中央からのアクションを成功裡に引き出せたわけではない。スィク・コミュニティの利害と州独自のそれとの間にさまざまな調整も課題となってきた。

周知の通り、この1970年代インドは、連邦政府の頂点に上ったインディラ・ガーンディーの周辺に起こる党内権力闘争の混乱を受け、非常事態宣言下に強権政治が重なるという最悪の事態を迎える。アカリー党にとっては、州政治の文脈で対峙するその会議派であったから、当然、その対応も一級の関心事である。結局、同党は会議派側と決定的に対峙する中央ジャナタ党の結束下に入り、この時期、民主主義の復活を強く支持する役割の一翼を担うこととした。だが、それは次の80年代のはじまりに再度復活する連邦会議派との抜き差しならない関係にやがてつながっていった。

パンジャープ州における先の自立的要求は実はその後も続いた。しかも次第にエスカレートするその文脈は、あろうことか、いつしか強硬派(テロリスト)として独自に台頭するスィク勢力の出現を許していた。対応に手をやくインド政府は1984年、パキスタンとの国境に近いアムリトサルのスィク教

総本山（ハリマングル・サーヒブ）へ軍隊を投入、籠城していた強硬派集団を武力で大量に制圧した。その数か月後、今度はガンディー女史自らがボディ・ガードであったスィク警備担当者にデリーの首相公邸で至近距離から殺害されるという事件が発生する。暴力の連鎖は止まらなかった。首都一帯は直ちにスィク住民を同じ市民が無差別で殺害するという虐殺事件の舞台と化し、事件発生に続く三日間でこの首都だけでも2700人を上回る死者が出る惨事となった<sup>(16)</sup>。

スィクを代表する政治勢力として、アカーリー党はその後、インド中央政治の失政と連結したこの80年代のしこりを忘れることなく、会議派とのスタンスの違いを常に意識していく政治のかたちを求めていくようになった。90年代からこの2000年にかけて今日も続くパンジャブ政治のなかにほぼ定着した事前（選挙前）「連立」という政治選択はその一つである。注目すべきはそのアカーリー党のパートナーであるが、70年代のジャナタの結束から分派し、現在、インド連邦政権を担うBJP（ここでは州インド人民党）である。興味深いことに、両者とも、もともと特定の宗教コミュニティの利害を擁護する政党であるという点で、その「排他性」は連立という實際を理論的には立ち上げない。事実、この組み合わせは普通ではなかなか想像し難いものだ。しかし、同州におけるその実験はただ対峙する反・会議派で歩みよっているだけではない。むしろ支持基盤のベースがあまりにも違い過ぎることを逆手にとり、単独ではなかなか踏み込めない支持層の獲得に各々の関心が向いていることは州政治の新たな局面である<sup>(17)</sup>。

直近の2017年州議会選挙では、隣接する首都デリーの政権担当党（AAP）が初めてパンジャブ州政治に越境して参加するという新しい構図も立ち上がった。遡れば、現在の首都デリーは植民地期19世紀の「大反乱」後、カルカッタからのデリー遷都（1911年）までの間、実はパンジャブ州に編成されていたという経緯がある。同州の二大政党政治は当面その大きな枠組みを維持しつつも、政権担当期をシーソー・ゲームしながら、ただ各々交替しているわけではない。その「常態」を揺らす政治アクターの出現や連立取り組み姿勢の実際は、州内有権者の厳しい審判と常に共に歩んでいることはもちろんである。



### 3. スーバ成立とパンジャープ州スィク社会

成長の時代の現在と異なり、自由化がはじまる前の長く<閉じた>インドであった頃、「カースト (caste)」は流れる情報量があまりにも少ないこの国について、一般に人々が抱くイメージのほとんど絶対的な部分を占めていたように思われる。したがって、それを今日このようにふいに話題にすること自体、「カーストはやはりまだあるのか」というある種の「インド」想起にたちまち力を貸してしまっているかもしれない。

終章となったが、スーバ後、パンジャープ州の多数派となったスィク・コミュニティの内側にまだふれてこなかった。スィク教というこの地で歴史的に誕生した宗教の背景についてはすでに1章で述べてきたが、その時代が立ち上げ、次代に確かにつなげようとした「精神」がまさに向き合ってきたものに「カースト」があった。もともと「カースト」はヒンドゥー教「正統派」思想を支える約束事として古代インドではじまったものだ。現在、パンジャープ州はその州人口の3割に、いわゆる「低位カースト」集団を抱える社会であり、その規模は全国一である。なお、この集団をとらえる呼称として、インドにはDalit「抑圧された人々」をはじめ、次にふれるSCなど、文脈により複数あるが、それらを大きく括り、本稿では「低位」を用いる。

もっとも、現代インドの「カースト」事情は、古代において発生した往時をそのまま今に引き継いでいるわけでは決してない。本章はその辺りを念頭におき、まずその「カースト」の理解を今日的に前進させる整理を以下の通り行なっておこう<sup>(18)</sup>。

①インドはイギリスからの独立後、1950年に制定されたインド憲法の基本的人権のなかで、法のもとの平等と公正な社会参画促進のため、「カースト」を理由とする差別の禁止はもとより、公務・公職上の機会均等、優遇措置の保証を定めた。とくにこの文脈において用いられる「後進階層 (Backward Caste)」や「指定カースト (Scheduled Caste/SC)」が具体的に指し示す対象は、四姓制度という訳語のもと、特殊身分制度として長くとらえられてきたこの枠組みに、実はもともと入りきれてもいなかった最・底辺の人々である(このためout casteという言葉がある)。なお、この憲法の起草委員長であり、初代法務大臣であったアンベードカル (B. R. Ambedkar) の出自はこのSCであった。英領インド時代、彼自身はその身分にあって例外的に高い教育機会



を得ることに恵まれたが、同憲法起草後、自らを縛るヒンドゥー教の枠組みを捨て、後に仏教に改宗したことはよく知られている。現在、SCはインド全土で16.6%を構成する（2011年国勢調査）。

②独立インドの「カースト」事情は①の民主的かつ進歩的措置により、直ちに様変わりしたわけではない。カースト「枠内」の最・底辺層がまだ実際には後進層として低迷を続けており、先のSC並みに「留保手当」が降りない彼らには長く不平等感がむしろ醸成されていた。ところが60年代に入り、インド農村部で「緑の革命」がはじまるや、その恩恵の重要な部分がこのあたりの階層にも広がった。やがて彼らはその経済的実力をもとに、それぞれの地域に根ざした地域政党を動かし、むしろ従来の「低位身分」を保証するさまざまな待遇を政治的に求めるようになり、1980年代にかけてその広範な存在をこの社会に印象付けた。「OBC（Other Backward Classes／その他の後進諸階級。＜その他＞とは、①の＜本来の＞後進層に対しての意）」または「中間カースト」と呼ばれ、1990年には時の連邦政権が全国一律にこのOBC向け「留保制度」実施を発表した（1980年の「マンダル委員会報告書」に基づき、93年発効）。いわゆる「留保」として優遇される手当では、人口比に応じたかたちで大学入学者枠、公務員枠、議員枠に及ぶ。これにより、憲法規定であった先のSCのそれと並び、「留保手当（quotas/reservations）」が現代インド政治の全面に「カースト」の文脈として立ち上がる事態が恒常化した。OBC出自の政治家たちが動かす地方政党の躍進もあり、この時期、高位カーストの政治結束も対抗的に顕在化したから、「手当」の実際は引き続き複雑な利害を社会に走らせ、今日に至っている。OBC推定人口は全インド人口（現在およそ13億）のおよそ40%から50%台ともされている。おおよその数でしか実態がとらえられないのは、独立インドの歴代政権担当党が政争化を憂慮し、「カースト」の詳細を明らかにする調査を長く控えてきたことに関係する。このため、英領インド時代に遡る1931年、イギリスが実施した最後の「国勢調査」がしばらくはその内容を伝える手がかりであるとされてきた。

③1990年、SC手当の対象がヒンドゥー教徒のほか、改宗後のシーク教徒、ならびに仏教徒にも拡大することが決定された。

④2011年国勢調査を前に、先の1931年から数え、80年ぶりに「カースト」調査実施の決断が下される（2010年）。ただし、当時の会議派率いる統一進歩

連合（UPA）政権は政治問題へのエスカレートを懸念し、その名称をあくまで Socio Economic and Caste Census 2011 であるとした。2015年7月、現BJP連邦政権が、調査利用目的をあらためて明確にしたうえで、慎重にその一部を公表した。

⑤ 低位カーストの社会上昇が可視的に次第に現実となっていくなか、高位カーストによる不満が旧弱者である SC、OBC に向けられ、暴力的に発展する事件も少なくない。2019年1月、モディ BJP 政権は「高位」カースト中の経済的後進層にも留保手当の付与を可能とする憲法改正法案を提出、上下両院にて同法案可決。

さて、パンジャープ州の場合、先にも述べた通り、その低位集団の規模もさることながら、内部がまた複雑に枝分かれしている事情がある。このため、同じ身分をもつ者同士のあいだに何か政治的結束でもありそうだが、それが無い。1980年代半ば、確かに同州出自のこの身分を代表する政治家が現れ「大衆社会党（Bahujan Samaj Party）」の結党を実現した。同党は一躍全国政治の舞台にも躍り出たが、結局、ここパンジャープ州では、一つの政治意思を反映するものとして支持を集めることには今日もなっていない。

パンジャープ州の「低位カースト」集団については、大きく次のような分類が可能である。A群（Mazhabi Sikhs, Balmikhis. 39.5%）、B群（Ad-Dharmis, Chamars / Ravidassias / Ramdassias Sikhs. 34.93%）のそれであり、実際にはさらにここにその他として10%強の集団が続くが、本稿ではこの主要A、B群二つに焦点をあてる<sup>(19)</sup>。実はこのうち、B群については、すでに1章のパンジャープ州の歴史で少しふれてきた。「低位」ではじまりながら、直近の歴史のなかで可視的にかなり「動き」があった集団である。同州北東部のドアーブ地区に集住し、先述の通り、伝統的には不浄分類の職業に従事してきたが、植民地統治下での機会到来により、とくに皮革業で大きな経済的前進を果たしたことは重要である。1920年代頃には、その集団のなかから、北インド中世に活躍したバクティ運動の詩人ラヴィダース（シク聖典『グル・グラント・サーヒブ』中にはその詠歌がある）をとくに慕う宗教運動がはじまり、シク教の主流から外れるかたちで、やがて独自にAd-Dharmiと呼ばれる一派を構成するようになった<sup>(20)</sup>。さらに同群中、続く以下の集団は基本的にすべてChamar 系列であるが、ヒンドゥー教徒のなかの同位集団から、過去にシク教へ改宗した経緯やその当時の職種（皮革、織工）等により、

このように現在も複数の呼び名をもつ。独立後、B群はすべて州行政上の分類としてはSCであるが、その高い教育志向や在外インド人として海外で得た安定的地位により、一般に言うところのSC的特徴を持たない。本人たちの自覚がすでにそうである。独立・進取的で政治意識も高く、主として都市部を居住空間とし、低位カーストのなかの「上昇部」とであると捉えたい。

他方、A群はそれとはかなり対照的である。パンジャブ州西北部マージー地区、南部マルワー地区の農村部に集住し、もともと伝統的には土地を持たず、大土地所有者のもとで農業労働に従事してきた集団である。ただし植民地時代から、都市部が成長してくるにつれ、その生活圏が求める清掃業務等の仕事を担うため、農村部を離れて「都市移住者」となった場合が少なくない。識字率も低く、総じて低賃金労働に長く甘んじていなければならなかったため、同州低位カーストのまさに「低迷部」となる。しかしながら、「都市部」に重なるその「後進性」は、州政治の文脈におけば、異なる意味を放った。その<票田>としての掘り起こしがはじまり、彼らに向けて州会議派が実際に動き出すのが、スーバ後の70年代である。確かに、同集団の社会経済的出自を考慮すれば、ライバルのアカーリー党を支える有力な支持基盤の対極をそれはいく。では、彼らはアカーリー党と袂を分かっていたかと言えば違った。その生活の困窮部分を支えたものに、カーストと闘ってきたスィク教の「信徒」であるとする誇りがあったからだ。そこにかかって、彼らの伝統的政治選択は「スィク」の大義をぶれずに掲げるところの、やはりアカーリー党であった。

その時期、インド憲法が留保する同州SC手当の比率は25%であった。1975年、この手当の5割をあらかじめA群Mazhabi Sikhsにのみ特化して付与する措置が会議派州首相ザイル・スィング（当時）によって発表された（Mazhabi Sikhsのみは同州SC人口のこれも3割を超え、最大人口規模）。やがて80年代に入り、インド連邦史上初のスィク大統領となる彼の、それはパンジャブ州時代最後の大胆な政治決定であった。いわゆる手当のなかの<特別手当>である。平等とはそもそも社会のあり方に応じた相対的な概念であると考えれば、「是正」にはそのような裏付けもありえたであろう。しかし、その実際は理念の実現というより、政治選択のなかで選り取られたところの過去にもあった方策（本章カースト整理②）を、基本権実現の仕組みとしてあった憲法規定のなかに「入れ子」型とする複雑な振り舞いとなっ

た。

やがてMazhabi 以下Balmikhiが声をあげ、それがA群内のすべてを対象とする「民主化」の徹底に進むと（2006年）、その全体の「都市化」も事実上加速した。だが、「民主化」と「都市化」が前進するその先は、B群の優位性がすでに先行的に支配する空間である。A群はひとまずその力関係のなかで廻りはじめた富を農村部に注ぎ（還元し）はじめ、現在、有力ジャートの伝統的支配空間に参入していることは注目すべきことである。つまり、彼らは農村部で土地を獲得する実力をつけはじめていたのである<sup>(21)</sup>。会議派の政治算段ではじまったこの方策が当事者たちに「メシア」的措置として覚えられれば、それは確かに州ライバルの「アカーリー票」の行方を左右しないはずはなかった。ただし、それ以上に、その実際の展開が描くことになった<光景>は、双方の政治勢力にも予測もできなかったことである。

「カースト」はそれ自体、単体枠のようなものとして存在するのでは決してない。他宗教（ここではスィク教）との続く関係、居住空間、職能アイデンティティ、政治選択、階級、公的保障制度、自我・プライド、他者認識、州経済、在外移民、歴史記憶、こうしたすべてと見事に連動し、人々のなかで機能する、それは依然この社会の太いリアリティである。

おわりに

スーバ成立という、インド・パンジャーブ州の州再編事情をたどりながら、今日に至る半世紀あまりを振り返ってきた。その要求は、実際のところ、狭いコミュニティ大義の実現を選び取る政治運動としてはじまった。しかし、途中から思わぬ事態を追い風とし、最終的に実現をみた。何かそこに既視感を覚えるのは、筆者がかつて英領インド・パンジャーブ州における「パキスタン建国運動」を追いかけながら見てきたものにひどく状況が似ているからだ。それでも、この半世紀に一つの区切りを覚え、南アジア現代史のこのような特異な位相を振り返ると、同じくその歴史に光をあてようとするさまざまな試みの、まさに「多媒体」的連鎖とでも言うべき現象が展開している時代であることが興味深い。

2018年9月21日、インド初上映となった映画「Manto」がまずその一つである。自ら社会派映画女優であり、また近年カンヌ国際映画祭の審査員も精力的につとめるナンディタ・ダースが監督二作目として2018年同映画祭の

「ある視点部門」に出品した作品となる。マントー (Saadat Hasan Manto, 1912~55) とは、20世紀ウルドゥー語文学においては不動の地位を得た作家であり、わずか40年余りのその生涯は英領インド・パンジャーブ州 (現インド側) ではじまり、独立後のパキスタン・パンジャーブ州で終わったものだった。既に述べてきた通り、ウルドゥー語とは破格の混成言語である。もともとインド亜大陸に西方イスラーム世界の影響が伝えられるなかで出来上がった歴史的経緯から、アラビア語文字を用い、語彙の起源を圧倒的にトルコ語、ペルシア語とし、文法に至ってはヒンディー語のそれを共有する。

マントーならずとも、パンジャービーとしてこの世に生を受け、それを生きるとは、すなわち、そのような言語的豊饒を歴史的・地理的特権としてまづは浴びることだった。人との関係の編み方を言語が教えた。彼がその後も長く生き、もしスーバについて同時代的に知ったならばどうであったろう。パンジャーブのさらなる分割を、ウルドゥー語人として。

この映画については、残念ながら未見であるが、同州の歴史に、マントー生誕100年を重ね、彼の時代、作品、人となりを読み解いた The Pity of Partition: Manto's Life, Times, and Work across the India-Pakistan Divide (New Jersey: Princeton University Press, 2013) が南アジア現代史の良書に加わった。著者アーイシャ・ジャラル (Ayesha Jalal) は叔父 (父の母方で、マントー本人) と叔母 (母の姉で、マントーの妻) との関係でこの作家につながっており、かつて80年代に The Sole Spokesman Jinnah, the Muslim League and the Demand for Pakistan (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) で「インド・パキスタン分離独立」研究に金字塔的業績を残したパキスタン系歴史家である。「マントー本」で限りなくありながら、まさにそのために、この著書は依然1947年の「分離独立」をなお深く問い続ける。

他方、その分離独立まで、いわゆる二つの文字で表記されうる言語であったパンジャービー語についても、特筆すべき発信がある。パンジャービー語本来の文字システムの復活とそれによる言語の活性化を若い世代に託そうと立ち上がった一女性のプロジェクトが画期的な絵本作りに結実したことだ。パンジャーブの歴史的土壌が育てた言語に相応しく、パンジャービー語には本来「グルムーキー (Gurmukhi)」と「シャームキー (Shahmukhi)」という二つの表記文字がある。前者はインド系ブラーフミー文字であり、後者はウルドゥー語文字と共通するペルシア・アラビア系文字である。パンジャー

ビー語とは、そもそもこの両文字を書き換え可能とする言語であり、その二つに通じている「パンジャービー語母語話者」のなかを、諸宗教が歴史的にまた行き交った。しかしながら、独立後、このパンジャービー語を支える環境は大きく変わった。インド側においては「シャームキー」表記のパンジャービー語はすでに日常的ではなくなっており、他方、パキスタン側においては「グルムキー」表記の断絶はもとより、「シャームキー」の＜一元的＞ウルドゥー語化とも言うべき現実により、書き言葉としてのパンジャービー語の将来は嘆かわしい事態なのだ。

独立インドに生まれ、1984年に発生したスィク教徒への集団的迫害行為（第二章）を北インドUP州において15歳で体験したグルミート・カウル（Gurmeet Kaur）女史は、現在、在米のスィク移民である。もともと現パキスタン領パンジャープ州に一家のルーツがあり、独立時のパンジャープの動乱を祖父母、両親から伝え聞いていた本人にとり、身をもって体験する「1984年動乱」を経て渡米（“Syllables that Bind”, Indian Express, Oct. 20, 2018）。やがて彼の地で母語パンジャービー語を次世代に伝えるライフ・ステージに入るや、インド亜大陸における同言語の現状を憂い、自らのキャリアを投げ打って、「統一（パンジャービー語でsaanjha/ undivided）パンジャープ版」両文字併記＋英語絵本（Fascinating Folktales of Punjab, 2017）の刊行にこぎつけた。この一言語のなかにすでに24もの方言があるという眩いリサーチ位置情報を添えて。

さらに2018年夏、イギリスはロンドン大学SOAS（東洋アフリカ研究学院）附属ブルネイ・ギャラリーにおいて、およそ2か月に渡り「Empire of the Sikhs」と題するスィク王国展が大々的に開催された。英領化前のパンジャープ州にあえて焦点を絞る企画は同国でも大変珍しい。わけても創始者としてスィク王国繁栄期を支えたスィク君主ランジート・スィング（Ranjit Singh, 1780～1839）の統治がもつそのコスモポリタンの性格に光があてられた意義は大きい。これまでイギリスの最終征服地以上には十分な関心が払われてこなかった近代パンジャープの重要な局面として、それはこの先も人々のなかに記憶されていく内容に値しよう。

スーバ後、この先の州の「かたち」が果たしてこのままか否か、それは誰にも分からない。この社会に固有の分断要因も気掛かりではある。しかしながら、今日パンジャービーとは、すでに多くの属性や関係を生きる歴史的・

政治的・社会的な複合実態であることはここに明らかにしてきたつもりである。

近代以降に成立をみた国民国家のあり方につながる人の単一イメージをその枠組みに据え、他との異質ばかりを取りだそうとする世界の覚え方はすでに終焉を迎えている。影響しあったり、つながったりする歴史の諸相に横たわる、おそらくは人間感度を相当に高め続けていなければ見失うかもしれない微かなく連続的なものこそ、来る新しい時代の仕組みや希望が立ち上がるようになってほしい。国境線のような仕切りや線ではなく。引き返すことも、また取り返すこともできない過去のさまざまな政治判断とその実際のなかで揺れ、動いたこのパンジャープの事象から、たぐり寄せ、考えることはまだ少なくない。

#### 【注】

- (1) Brass, Paul R., The New Cambridge History of India (IV・1/ The Politics of India since Independence), Cambridge: Cambridge University Press, 1990, pp. 135-152.
- (2) Sugiyama, Keiko, "Muslim Separatism in the Punjab, 1937-47" (M. Phil論文/1987年7月ジャワハルラル・ネルー大学大学院提出).
- (3) 同上論文、並びにSingh, Dalip, Dynamics of Punjab Politics, New Delhi: Macmillan India Limited, 1981, pp. 1-12.
- (4) カピール／橋本泰元・訳注『宗教詩ビージャク インド中世民衆思想の精髓』(東洋文庫703), 平凡社, 2002年.
- (5) 内藤雅雄・中村平治 [編]『南アジアの歴史 複合社会の歴史と文化』(有斐閣アルマ), 2013, pp. 206-208. 板倉和裕「インド連邦制と多民族共存—多様性を受容する枠組みの形成過程を中心に—」『広島大学現代インド研究—空間と社会』vol. 6 : 1-13, 2016, pp. 7-8.
- (6) Brass (1990), op. cit., pp. 149-152.
- (7) Jones, Kenneth W., "Hum Hindu Nahin: Arya - Sikh Relations (1877-1905)", The Journal of Asian Studies, vol. 32, no. 3, 1973 and Arya Dharm: Hindu Consciousness in 19th Century Punjab, Delhi: Manohar, 1976.
- (8) Puri, Harish K., "Scheduled Castes in Sikh Community: A Historical Perspective", Economic and Political Weekly, June 28, 2003, pp. 2693-2701.
- (9) Singh, Pritam, "Class, Nation and Religion: Changing Nature of Akali Dal Politics in



- India”, Commonwealth & Comparative Politics, vol. 52, issue 1, 2014; Singh, Dalip (1981), op. cit., pp. 23-43.
- (10) Brass (1990), op. cit., pp. 162-164, pp. 170-174.
- (11) Singh, Dalip (1981), op. cit., pp. 189-193.
- (12) Government of India, Report of the States Reorganisation Commission, New Delhi: Government of India Press, 1955, p. 141.
- (13) Singh, Khushwant, A History of the Sikhs (Second Edition / Vol. II: 1839-2004), New Delhi: Oxford University Press, 1999, pp. 299-303. 本稿以下、スーバ成立までの事情も同書参照。
- (14) もちろん多党政治であるので単純化はできない。詳しくはSingh, Pritam (2014); Kumar, Pramod “Punjab Politics: Contesting Identities and Forging Coalitions”, Economic & Political Weekly, Jan. 21, 2017, pp. 44-50.
- (15) Singh, Khushwant (1999), pp. 337-350 & Appendix6., 内藤・中村 [編], 前掲書, 231-232頁。
- (16) 2018年12月17日、デリー高裁は事件発生から34年ぶりに、主犯格とされた地元デリー会議派の古参党员（元下院議員）を終身刑に処し、「少数派」を窮地に追い込んだ当時の異常な事態に初めての司法判決を下した。なお、本件については、この間、9つもの調査委員会が設置された。
- (17) Kumar, Pramod (2017).
- (18) ③の局面までは、杉山圭以子「社会的弱者層とその課題」（第4章）古賀正則・内藤雅雄・中村平治 [編]『現代インドの展望』岩波書店、1998年。
- (19) Jodhka, Surinder S. and Avinash Kumar, “Internal Classification of Scheduled Caste: The Punjab Story”, Economic & Political Weekly, Oct. 27, 2007, pp. 20-23; Sharma, Neeru, “Caste in Punjab: Political Marginalization and Cultural Assertion of Scheduled Castes in Punjab”, Journal of Punjab Studies, vol. 19, no. 1, Spring 2012, pp. 27-47; and Ram, Ronki, “Internal Cleavages among Dalits in Punjab”, Economic & Political Weekly, Jan. 21, 2017, pp. 54-57.
- (20) Ram, Ronki, “Ravidass Deras and Social Protest: Making Sense of Dalit Consciousness in Punjab (India)”, The Journal of Asian Studies, vol. 67, no. 4, 2008, pp. 1341-1364 and “Sacralising Dalit Peripheries: Ravidass Deras and Dalit Assertion in Punjab”, Economic Political Weekly, Jan. 2, 2016, pp. 32-39.
- (21) Judge, Paramjit S., “Punjab at the Crossroads”, Economic & Political Weekly, Oct. 17,

2015, pp. 17-19. このことは、ジャートが「農業耕作地」と密接につながってきた時代の変化をも意味する。現在、「土地」に向かうその関心は不動産業や鉱山業に著しく移っているという。